

文学を通して見た「フランス革命」観

——試論——

梶原愛巳

一

今から二十年ほど前のことになるが、フランス語を習い始めてようやく半年あまり経ったころ、「麻ほぐし」(Le Broyeur de lin) というエルネスト・ルナンの作品をテキストで読んだ。ルナンは、いうまでもなく、フランス三大文章家の一人と評価されているとおり、仏和辞典と首引きで最初のテキストを読んだ私にも、十分な理解が出来ないままでも文学上の深い感銘を与えてくれた。それは、ルナンが幼年時代を回想しながら書きためた『思い出』(Souvenir d'enfance et de jeunesse) の一章であったが、母の語ってくれるその思い出話は、アンシャン・レジームの下で特権を享受していた貴族が、大革命の怒濤に押し流されて片田舎に零落の身を消光している、その身辺で起った哀しい物語であった。

「司教町と並んでちいさい貴族町ができたのは大革命の少し前のことである。大部分は近隣のいなから出たものだった。ブルターニュにははっきり区別される二種類の貴

族があった。一方は、貴族の肩書きをフランス国王からいただいたものであり、フランス貴族の共通の長所と短所を最高度に発揮していた。他方はケルト起原のもので、きついブルターニュ貴族である。……

「大革命は、この司祭や修道僧達の巢にとって、外見上死刑の宣告にひとしかった。トレギエの最後の司教は、あの晩、司教庁の屋敷続きの林の裏門をぬけて逃げ出し、イギリスにのがれた。法王庁とボナパルトとの和親条約はこの司教区を廃止する結果となった。頭をもがれた哀れな町には、郡役所さえおかれなかった。頭をもがれた哀れな町で、より俗な、よりブルジョワ的な町であるラニオンやガングンが選ばれた。……」

ブルジョア革命の必然的結果が「思い出」話に描かれる。「ああ！ そう！ あれは、ねえ、麻ほぐしの娘さんだよ。

——誰です、その麻ほぐしというのは？

——お前にこの話を一度もしたことがなかったかねえ。なんですよ、今では、誰に話しても、わからないだろうが、

あんまり古い話だから。私がこのパリへ出て来てから以来というものは、もうとても私には言えなくなったことがいろいろありますよ……ああしたい、なかの貴族はほんとに尊敬されていたものだけれどね！ これこそほんとの貴族だと、私はいつでも、そう思ったのですよ。ほんとにね！ パリの人達にこんな話をしたら、さぞ笑うだろうね。あの人達は自分たちのパリしか眼中にないのだから。ほんとうは、世間の見えない人達だと、私は思いますよ……あのないなかの年をとった貴族達が、貧乏はしていても、どんなに尊敬されていたか、ほんとに、今の人にはとてもわからないことさ。」

こうした昔話のなかにアンシャン・レジームと大革命の激動を法学部に学ぶ私が、ルナンとその母の対話から偲ぶようになったのも、実は、文学作品を読み漁っているうち次第にその様になったものと考えられる。もとより、外国語としてフランス語を履修していた私に、表題に掲げたような、「文学」と「政治」への明確な関心などあるはずがなかった。そうした問題に関心を抱くようになったのは、「モンテスキューの政治思想」を「修士論文」として纏めることになったからであろう。

周知のとおり、十八世紀人モンテスキューは啓蒙思想家として著名であり、その主著『法の精神』(De L'Esprit Des Loix, 1748.)は、法学、政治学、社会学の分野で古

典的必読書となっている。専制政治を極度に嫌ったモンテスキューが、オルレアン侯の摂政時代にフランス社会を諷刺した書翰体の文学作品『ベルシャヤの手紙』(Lettres Persanes, 1721)で文壇にデビューしたあと、続いて、クレルモン嬢(M^{lle} de Clermont)のために書いたといわれる『グニード宮殿』(Le Temple de Guide, 1725)を発表していることから、当時の社交界は所謂サロン文化の温室であったがよくわかる。こうしたサロンで古い家系を誇りとしたモンテスキューの『わが所感』(Mes Pensées)や『落穂集』(Spicilege)などは、十八世紀における「文人」(Homme de Lettres)としての面目躍如たるものが窺われる。

同時代人には、また、『哲学書簡』(Lettres anglaises ou philosophiques, 1734)でイギリスの紹介に努めた文壇の大御所、ヴォルテール(Voltaire, Francois-Marie Aronnet, 1694-1778)が、理神論の立場からフランスにおけるアンシャン・レジームの愚昧と迷妄を指弾した。こうしたアングロマニアの活躍も与って、十八世紀も中葉になると、百科全書派や重農学派による目覚めが徐々に社会改造へと動きはじめ。無名のジャン・ジャック・ルソーがディドロと親交を深め、やがて不朽の名声を博するものこの頃であった。

ボルボン王朝の下で、フランス社会は、やがて封建制度

が覆えされる日を「哲学者たち」のあらゆる種々のパンフレットによって、次第に、第三身分とランクされた非特権社会の中に醸成していくのである。ヴェルサイユ宮殿における豪盛な奢りを支えるものは、実にいろいろな名目の税金であった。財政の破綻から、なんとか抜け出そうとする苦肉の策は、特権身分にも課税するという近視眼的案であった。このため、一七八八年に「貴族の叛乱」を惹き起こす。大革命の勃発する前年に起こった、課税に対するこの抵抗は、実に覚醒の事件として第三身分の目に映ったであろう。

シエース (Sieyès) の主張を簡潔に表現したパンフレット『第三身分とは何か? すべてだ。今日まで何であったか? 無だ。何になろうとするか? 何ものかにだ。』という訴えが、こうしたフランス社会の矛盾を衝いて、大革命前夜、確かに、ブルジョアジーの意識に共感をよびおこした。一六一四年以来ただの一度も召集されたことのない「三部会」(États-Généraux)は一七五年ぶりで開催を余儀なくされたが、その投票方式をめぐって第三身分は固有の権利を主張する。斯くして、封建制度の牙城と目されたバスチーユの攻撃にはじまるフランス大革命が勃発した。もとより、革命の進展と推移を述べることが拙稿の目的ではないので、それらを割愛して、本題に戻ることにしよう。参考までに、手近かな書物をあげておく

河野健二著『フランス革命小史』(岩波新書)

桑原武夫編『フランス革命の研究』(岩波書店)

A・ソブール『フランス革命——一七八九—一七九九

——』(岩波新書)

J・M・トムソン『ロベスピエールとフランス革命』

(岩波新書)

二

「フランス革命」にまつわる文学作品と言っても、いろいろな型があるので、それらを一概に論じることは余りにも無定見であろう。たとえば、少年時代に読んだ『紅はこべ』が、大革命に取材した作品であったことなど、当時の記憶をたどっても甚だ朦朧とした歴史的認識しか持ち合わせていなかったことを告白しないではおれない。とは言っても、少年の日には、結構、胸をときめかせながら、理由もなく、『紅はこべ』に変身するイギリス貴族が、亡命を余儀なくされたフランス貴族を千変万化の戦略戦術を駆使することによって国外逃亡を助ける、という物語に血を湧かしたものである。ハンガリーに生まれ、イギリス人と結婚した『紅はこべ』の著者バロネス・オルツイは、フランス革命に取材した小説を幾つも書いている。しかし、流血と破壊の打ち続くフランス革命に対しては、心情的にも、ブルジョワジーの共和政治を非難しないではおれなかつ

た。ドーバー海峡を隔てたイギリスと動乱のフランスとが同時に舞台となるのも、この種の作品にみられる特徴でもあろう。

ロンドンとパリを舞台に描き出される市井の人びとが作品の主人公となっている、チャールズ・ディケンズの『二都物語』(A Tale of Two Cities)も「フランス革命」を背景にした一種の歴史小説と考えられる。イギリス文学におけるディケンズの存在は、当時の社会がつくり出した貧困や腐敗を訴えている点で、社会科学を専門とする筆者にも見逃せない作家である。事実、『資本論』(第一巻の刊行一八六七年)を書いていたカール・マルクスが、ディケンズと同じロンドンに住み、資本主義のつくり出す経済的矛盾を分析していたことも、あながち偶然ではあるまい。マルクスが『経済学批判』を出版した同じ年に、ディケンズの『二都物語』が発表されているのであって、マルクスやエンゲルスが絶賛したことも頷けるように思われる。

英文学におけるディケンズの評価はどうであろうか？

「貧窮の中に人となったディケンズは、終生、かわることなく、虐げられ、圧迫される階級の味方であった。彼は、暴虐と搾取をあえてする階級——アンシャン・レジーム旧制度下のフランス貴族や、イギリスの新興ブルジョワを、心から憎悪した。そして、教会の牧師に不信を示し、権威に反抗的であったが、生涯かわることなく、新約聖書に現われるキリストの言行

に深く帰依した。彼の血肉となったキリストの精神とは何だろう。それは、悩める者、虐げられる者に対する同情であり、あわれみであり、愛であった。彼は民衆の代弁者として、貧窮の存続を願うものに嫌悪と反対を示したが、反抗運動を組織するラジカル(急進派)に対しては、むしろ、おもてをそむけた。同時代人であるマルクスやエンゲルスが大いに賞揚したこと(エンゲルスは、あらゆる国を結ぶ偉大なる精神的家族の一人と書いた)も、彼にとって風馬牛であり、むしろ、ありがたみわくであったのかもしれない。」(河出書房版『世界文学全集・6』、猪俣礼二氏「解説」二頁)

『二都物語』におけるディケンズの「序文」によれば、「大革命前、および、大革命中のフランス国民の状態に関して、ここに(ごく僅かながらも)若干言及されているところは、いずれも実際信頼するに足る証拠に基くものである。カーライル氏の驚嘆すべき著作の哲理については何ものをもつけ加え得べくもないが、あの恐るべき時代をわかりやすく、絵ときせんために何ものかをつけ加えようとするのが私のねがいの一つであった。」

「響く足音」と題する、第二部・第二十一章に描かれる「バスティーユ攻撃」の様子は、小説ならではの表現できないヴィヴィッドな描写だ、と言えないであろうか。「憂国の士よ、友よ、用意はできたぞ! バスティーユへ!」サン

・キエロットの一味に加わった、ドファルジュのとどろく雄叫びが聞こえる。

「ひびき渡るとよめきは、あたかも全フランスの総ての声か、凝って、この呪うべき一語となったかのよう、人の海はまき上り、波は波に、海底は海底にこたえて、市街にみちあふれ、バステューユへ、バステューユへと殺到した。警鐘は鳴りひびき、大鼓はうち鳴らされ、海は怒り狂って、その新しい岸辺をめがけてとうとうとうち寄せた。攻撃開始。」

「深い壕、二重のハネ橋、厚い石の壁、八つの高塔、大砲、小銃、火と煙。火焰をくぐり、煙をくぐり抜け——火のなか、煙のなかで、人の海は彼を大砲のところまで打ちあげたと見る間に、早くも彼は、砲手になりました——酒店のドファルジュは、この恐るべき二時間の間、男らしい兵士としてふるまった。」

引用を続ける余裕がないので、ディケンズの力点が那邊に置かれているかを十分に伝え得ない憾みが残るけれども、要するに、フランス革命は歴史的必然として肯定されるばかりでなく、アリストクラティックな支配を否定することにより、極端な社会の不均衡を是正しようとする、ラジカル・フィラントロピズムに思想的底流が見出されるように思う。

フィラントロピズムの立場から、貧困と悲惨の根本悪を

洗い出そうと、社会に訴えた同時代のフランス人として特筆されるのは、おそらく、ヴィクトル・ユゴーであろう。フランス文学史におけるロマン派の巨匠として揺ぎないユゴーが、大革命に続くフランス社会の悲惨と矛盾に目を覆うことなく、「自由」と「正義」の問題を自らの作品の主題としたことは多言を要しないはずである。

『噫、無情』とか『ジャン・ヴァルジャン物語』とかの作品名で一般に親しまれている、この文学こそは、ユゴーが冒頭の「序」に記した心底からの訴えを読者の脳裏に焼付けないではおかない。すなわち、

「法律と風習とによって、或る永劫の社会的処罰が存在し、斯くして人為的に地獄を文明のさなかに拵え、聖なる運命を世間的因果によって紛糾せしむる間は、即ち、下層階級による男の失墜、飢餓による女の墮落、闇黒による子供の萎縮、それら時代の三つの問題が解決せられない間は、即ち、或る方面に於て、社会的窒息が可能である間は、即ち、言葉を変えて言えば、そしてなお一層広い見地よりすれば、地上に無知と悲惨とが存する間は、本書の如き性質の書物も恐らく無益ではないであろう。一八六二年一月一日、オートヴィル・ハウスに於て、ヴィクトル・ユゴー」

二十八歳の時にユゴーは『死刑囚最後の日』(Le dernier jour d'un condamné, 1829)を世に問うたが、

大革命の遺物とも言える忌まわしい「断頭台」^{キロチン}による処刑は、宜しく文明社会から追放されるべきことを、熱情をもって敘述している。また、晩年のユゴーは、大革命の動乱を直接の題材とした『九十三年』(Quatrevingt-Treize, 1874)を制作している。そして、一八七四年三月二日にエドガール・キネに宛てた手紙の中で、ユゴーはつぎのように述べている。「ひとびとは『恐怖』を革命の力になしうると考えてきたようですが、ぼくは、ぼくとおなじ意見のきみと手をあわせて、革命をこの恐怖から解放したいと思えます。この作品の中で、ぼくは革命が無邪気さに支配されるさまを描きました。ぼくはこの恐ろしい『九三』という数字の上に、恐怖をやわらげる光を投げるようにつとめました。」このように、ユゴーは年を追うにつれて革命を支持するようになっていった。しかし、革命の偉大さや必然性を認めながらも、ユゴーはつねに暴力や恐怖を未来の革命からは抹殺しようとしている。

大革命時代の「ヴァンデの乱」に取材した『九三年』は、厳密な意味での歴史小説ではない。それはむしろ、ユゴー自身の革命観を、作者が登場人物を通じて表現した思想小説にほかならない。「この意味でシムルダン、ラントナック、ゴーヴァンの三人の主演はユゴーの革命観が生んだシンボルであり、おのおのが典型として描かれている。シムルダンは革命の『冷厳さ』を具現化する。彼は純粹無

比な革命家であり、アンシャン・レジームを破壊する『恐怖政治』の宿命を身にやどしている。これに対立するラントナックは反革命精神の化身であり、『鋼鉄の意志をもった』ブルターニュ人である。そして、このふたりの巨人のうしろには、激突する両陣営の脇役たちが描かれている。ラドゥ軍曹はパリっ子式な冗談好きの共和主義者であり、アルマロやイマニユスは、ルイ十六世の殺害者たちに対して起こったブルターニュの反抗を表現する。作者ユゴーはこの両陣営のうち、いずれかといえば、革命と進歩にくみしている。(筑摩書房版『世界文学大系25』辻利「解説」、三七〇頁、三七二頁)

ヴィクトル・ユゴーの大革命に対する肯定的姿勢が培われたと思われる頃の作品には、上に述べた『噫、無情』、即ち、『惨めなる人びと』(Les Misérables, 1862)がある。この物語は、一八一五年より三十二年に至るフランスの叙事詩であるばかりでなく、社会の底辺に呻吟する惨めな人びとが生み出される根本悪を追求してやまない。第一部・第一編に登場するミリエル氏は、教区の人びとからビヤンヴニエ閣下 (En 1815, M. Charles-François-Bien-venu Myriel était évêque de Digne. C'était un vieillard d'environ soixante-quinze ans.) と呼ばれるほど信頼と尊敬を集めた司教であった。この司教と嘗ての国民公会議員との間に取り交わされる大革命の理念こそ

は、ユゴーにおける革命観の進展を如実に表わしている。

一七九三年の冷酷なテロリズムを非難するミリエル司教に対して、名をG某という、死を目前に控えた、共和主義時代の元国民公会議員は、大革命が正当な理由をもつことを説き、彼の意見から司教は大きなショックを受ける。ここでの対話は、ほかならぬユゴーが革命の偉大さを認めるばかりでなく、次第にその必然性をも肯定するようになってきた何よりの証左であろう。ミリエル司教との対話におけるG某元議員の独白めいた言葉――

「ルイ十六世については、私は否と言ったのです。私は一人の人を殺す権利を自分に信じない。然し私は悪を絶滅するの義務を自分に感ずる。私は暴君の絶滅に賛成したのです。言い換えれば、婦人に対しては醜業の終滅、男子に対しては奴隷の終滅、小児に対しては闇夜の終滅に。私は共和政治に賛成することによって、以上のことに賛成したのです。私は友愛と親和と曙とに賛成した。私は偏見と誤謬との倒壊を助けた。誤謬と偏見との崩落は光明を来すものである。吾々は古き世界を倒したのです。そして悲惨の容器であった古き世界は、人類の上に覆って喜びの壺となったのです。」

世間の人びとからは怖れられて、自ら隠遁者となったこの国民公会議員に対してミリエル司教は言い次ぐ――

「錯乱したる喜びとも言えるでしょう。そして今日、

一八一四年と称するあの痛ましい過去の復帰の後に、喜びは消え失せてしまったのです。不幸にも事業は不完全であった。私もそれは認める。吾々は事実のうちに於て旧制を打破したが、思想のうちに於てそれを全く根絶することは出来なかったのです。弊風を破る、それだけでは足りない。風潮を変更しなければならぬ。風車はもはや無くなったが、風はなお残っているのです。」

ところが、元国民公会議員は反駁する――

「あなた方は打破せられた。打破することが有益であることもある。然し私は憤怒の絡みついた打破には信を置けません。」と革命の理念を吐露したのである。「フランス革命史」を繙くまでもなく、封建制度の打破こそは、まさしく、古典的ブルジョア革命の正当性であった。しかし、一八一四年にはルイ十八世による「王政復古」が行なわれたのである。この歴史的事実は、一体、何を物語るのだろうか？ イギリスの著名な革命史家アルフレッド・コバンが指摘するように、「フランス革命史における最大のギャップは、逆説的に言うると、反革命の歴史にはかならぬ」⁽¹⁾ にはあるまいか！

隠遁者の信念に満ちた革命理論に対して、ミリエル司教は自ら呟くことを禁じ得なかった。すなわち、「正義にはその憤怒があるものです、そして、正義の憤怒は進歩の一要素です。とまれ何と言われようとも、フランス大革命は

キリスト降誕以来人類の最も力強い一歩です。不完全ではあったでしょう。然し荘嚴なものでした。それは社会上の卑賤な者を解放した。人の精神を和らげ、それを静め慰め光明を与えた。地上に文明の波を流れさせた。立派な事業であった。フランス大革命は実に人類を聖めたのです。」このように、大革命の精神を理念化した司教こそは、実に、ユゴーその人にほかならないのである。

三

大革命はフランス社会に起こるべくして起こったが故に、旧制度下の身分意識と共和政治の市民意識とは、必然ぶつかりあうことになった。絶対王政の下で特権を享受していた僧侶や貴族の多くは、大革命の難を避けて国外に亡命したため、彼等はエミグレ (émigrés) と呼ばれた。こうした人びとの中でも、とりわけ、サヴォワ出身のジョゼフ・ド・メーストル (Joseph de Maistre, 1754—1821)、バンジャマン・コンスタン (Benjamin Constant, 1767—1830) との仲を取沙汰されたスタール夫人 (Madame de Staël, 1766—1817) の二人は、ロマン主義的秀麗気ななかで「フランス革命批判」の文筆活動を行なっている。

一七九二年九月、フランス共和国軍がサヴォワに侵入するや、サルディニア国王に忠実なメーストルはスイスに亡命し、この地で、共和政治批判の文筆を揮った。たとえ

ば、一七九六年にローザンヌ (Lausanne) で出版されたメーストルの『フランスについての考察』 (Considerations sur la France) によれば、大革命は、要するに、人びとがキリスト教を忘れ、腐敗や無神論に陥ったのを懲らすため、神の下したもうた罰である。それ故、この大革命は人力をもっては説明され得ないものであり、これを指導しようとした政治家は、単なる受身で意識のない道具にすぎなかったのであり、それは超自然的、救世的事実であること、すなわち、ひとり神のみが一切を導かれたことを解さなければならぬ、と力説している。

法王至上権論者たるド・メーストルとは反対に、十八世紀の哲学に導かれたコンスタンは、一七九九年に法制委員会の一員となったが、その非妥協的な自由主義のために亡命を余儀なくされたとき、ジェルメーン・ネッケル (Germaine Necker) すなわちスタール男爵夫人にエミグレのメッカ＝コペエ (Coppet) で出会った。少しも因習に捉われないこの男爵夫人の書いたすべての著作のなかで、おそらく最も重要なものは、死後に公刊されたものだが、『フランス大革命の主要な事件に関する考察』 (Considérations sur les principaux événements de la Révolution Française, 1818) であろう。

メイヤーの見解に従えば、「この研究と共に、革命の初期の批判的な解説がつきつきにではじめたのであるが、本

書は純文学的見地から見ると——ここでは、そうしたことにわずらわされる必要がないのだが——、たしかに、彼女の著書の『ドイツ論』(De l'Allemagne, 1810)ほどにはまだ洗練されていない。それにもかかわらず、フランス政治思想の研究者にとって『大革命の考察』^{コンシテラシオン}は非常に大切なものである。スタール夫人は一七九一年以後の大革命の傾向を、あの深刻な、画期的な社会的変革の真実の目的をゆがめるものだと思っている。ジャコバン派の恐怖政治、統領政治、およびナポレオンの压制政治などは、彼女にとって、大革命が保障しようとした諸々の個人的権利の明々白々な侵害なのである。」

フランス大革命の政治理念は、封建制度を打破してブルジョアジーによる共和政治の樹立を眼目としたが、そのために反革命分子はことごとくギロチンに首を刎ねられるという、流血の惨劇を展開した。こうした恐怖政治^{テロ}は、果して革命の理想を貫徹する手段として肯定されるのであろうか？ このことは当然にヒューマニズムの立場から疑問視される。

アナトール・フランス (Anatol France, 1844—1924) の『神々は渴く』(Les Dieux ont soif) も、「一七九三年ころの、いわゆる大革命恐怖時代に取材した小説である。主人公の青年画家ガムランは、革命裁判所の陪審員となつて、ロベスピエール主義を信奉し、これに忠実のあまり、

反愛国主義者、反革命思想家の疑のあるものを片はしから断頭台に送り、遂には友人や、妹の恋人に至るまでその例に洩らさなかつた。しかし、革命政府の倒壊により、彼自身も、ロベスピエール等とともに断頭台に上ぼる運命となるのである。彼にはエロディと呼ぶ愛人があり、彼女は、ガムランのこうした血に餓えた姿に恐怖を覚えつつも、冷酷な正義漢としての彼のなかに一種の魅力を感じずにはいられなかつた。」(根津憲三訳・角川文庫、「あとがき」三〇三頁)

革命の理想を逸脱した裁判は、民衆に政治的無関心 (Political Apathy) を呼び起こすだけで、ファナティックな処刑はさながら連合赤軍の「総括」にも相似たものであろうか……「恐怖政治は、月のたつにつれて、ますます激烈となった。毎晩のように酔っぱらった看守たちは、番犬を引き連れて、起訴状を手に、地下牢から地下牢へとまわり、大声で名前を呼びたてた。しかも、二十名の指名犠牲者の名を呼べばよいところを、読みちがいのために、二百人も囚人を脅えさせるのだった。血腥い夕闇のたれこめた獄舎の廊下を、毎日のように、二十名、三十名、五十名の死刑囚が、不平一つ言わずに、通っていくのだった。これらの死刑囚は、老人もあり、婦人もあり、青年もあり、それに身分も、性格も感情もとりどりであるところを見ると、彼らは籤を引いたのではないかと疑われるほどだ

った。」(根津訳、前掲書、二二八頁)

革命裁判所で長い公判が行なわれている間、じつと眼をつむり、自己の思想や言動を冥想するエヴァリスト・ガムランの表白こそは、アナトール・フランスの「革命」に対する懷疑の表白なのであろうか？　いふなれば、主導権争奪のため「内ゲバ」を繰り返すトロツキスト集団の過激な思想と行動についていけない、と言った心情でもあろうか？

へ悪人どもがむりやりにマラを穴のなかに隠れるようにしむけ、彼を一羽の夜鳥にしたのだ。謀叛人たちが夕闇のなかに身を隠しているのをその眼で見破るミネルヴァの鳥にしてしまったのだ。今や、コルドゥリエ旧修道院の庭園のなかで永遠に眠っている人民の友(マラ)さえ知らなかったほどの鋭敏さをもって、国家の敵を見抜き、そして、裏切り者を告発できるのは、あの青く、冷たく、平静な眼ざしだ。この新しい救世主(ロベスピエール)は、前者に劣らぬ熱意と、それを上まわる洞察力の鋭さとをもって、誰も見なかったところのものを見、彼が一指をあぐれば、あまねく人々を恐怖に戦かせるのであった。彼は善と悪、徳と悪徳との間にある、眼に見えぬほどの、きわめて微妙な差異まで見分けることができるのだ。だから、もし彼がいなかったならば、人々は善と悪、徳と悪徳を混同してしまい、国家と自由とのために大きな損害を与えたにちが

ないのだ。彼は自分のまえに、彎曲し得ない、細い線を引いていて、右左を問わず、この線からはずれぬものは、誤謬、罪悪、不徳義にはかならなかつた。この廉潔の士は、人々が誇張や弱さのために、あるいは理性の名のもとに信仰を迫害し、あるいは宗教の名のもとに共和国の法律に抵抗するものは、いかに外国のために力をかすことになるかを教えている。ル・ペルティエやマラをやり玉にあげた不徳義な輩も、彼らに神のごとき栄誉を与えて、彼らの死後の名声をきずつけようとする輩と同じように、外国のために力をかすことになるのであった。秩序と叡智と便宜の思想を斥けるものは、誰でもみんな外国のまわし者であり、また、風俗を害し、道徳に背き、心の変調のうちに神を否定するものは、誰でもみんな外国のまわし者であった。狂信的な聖職者は死に値する。しかし、また、狂信と闘うにしても、反革命的な闘争の仕方だつてあるのである。犯罪的な信仰の放棄もある。温和でも、共和国を滅亡させ、過激でも共和国を滅亡させるのである。(根津訳、前掲書、二三三頁)

へしかしながら、愛国的な心にとっては、それはなんと
いう驚きのもとであり、不安のもとであることだろう！
なに！　では、民衆を裏切るのには、ミラボーや、ラファ
イエット、バイイー、ペション、ブリッソンだけではまだ不
十分だというのか？　これらの裏切り者を告発した人も必要

だったのだ。なんだって！ 革命をまき起こした人々のすべてが、革命を失うためにのみ、革命をまき起こしたのか！ 偉大な日月をつくり出したこれらの偉大な人たちは、ピットやコブール等とともに、オルレアン王朝や、ルイ十七世の後見を準備していた。なんだって！ ダントン、彼こそはモンクだ！ なんだって！ 自分たちが断頭台に送った連邦主義者よりも、もっと不実であったショームットやエベール派革命党員は帝国の滅亡を企てたのだ！ しかし、不実なダントン、不実なショームットの輩を死に駆りたてた人たちのなかから、ロベスピエールの青い眼は、明白にも、更にもっと不実な者たちを見つけ出しはしないだろうか？ いったい、いつになったら、裏切られた裏切り者の憎むべき連繫と、廉潔の士の洞察力とは終りになることだろうか？……（根津訳、前掲書、一三五―一六頁）

長々と引用してきた、第二〇章の表白は、恐怖政治テロールそのものに対して、流血や暴力、権勢や英雄主義を拒否するアナトール・フランスの懐疑主義が、そのままエヴァリスト・ガムランを通して表現されているように思う。

なお、『神々は渴く』という表題の意味については、憶測の域を出ないが、おそらく、第十九章にある老プロトリーの言葉のなかから、これを引き出せるのではあるまいか：「戦争なんてものはけっして技術ではなく、ただ偶然が戦闘の運命を決するのです。将軍が二人いて、その二人と

もが愚かだとしても、結局、二人のうちのどちらかが勝つにきまっていますからね。あなた方が神と崇めているサーベルをぶら下げている連中の一人が、いつかはお伽噺に出て来る鶴が蛙を呑み込むように、あなた方を片っぱしから食ってしまうから、覚悟しなさい。そのときこそ、この男は本当に神となるでしょうよ！ 神々はその食欲で評価されるものですからな」（根津訳、前掲書、二一九頁）

四

直接に自分の専攻する社会科学部門の研究書を離れて、一般に読まれる教養書のなかから、専門にかかわる幾冊かを「フランス大革命」に焦点を絞って整理してみただけのことだが、こうした作業を通して、「文学」と「政治」の融合というか、接点を求めることが出来るように思う。純文学的立場から言えば、一顧だに価しない作業なのかも知れないが、「思想」のない文学は、たとえ、それが「純文学」として高い評価を受けるものであっても、単なるフィクションであったり、「芸術のための芸術」といった現実離れの創作にすぎないのであって、決して社会の矛盾を訴えたり、変革の波紋をよぶ一石になるといったことはないであろう。この観点から「文学」を見直すならば、鑑賞や解釈を一步も離れ切れない因襲的文学研究の在り方とは違った、純文学的セクショナリズムを突き破る方向が浮かび

出てくるはずである。

文芸批評については、一九四二年の毛沢東による『延安文芸座談会での講話』が、一応の参考になる。抗日戦争のさなかに「文芸」の在り方が論議されただけに、それを単純に受け容れるわけにはゆかないが、「文芸批評には二つの規準があり、一つは政治的規準であり、他は芸術的規準である」ことは、確かに革命的提言であった。両次にわたる世界大戦の結果として、文化現象は急速に変貌しつつある。それにつれて、「文学」のとらえ方も次第に変わっていく。従来ともすれば、「文学」はあくまで「文学」であるとして、「文学」と「政治」を切り離す研究に終始する向きもあったが、最近になって、こうした文学研究の在り方に疑問が提起され始めた。

たとえば、第二帝政末期からパリ・コミューンに至る危機の時代の追体験を試みた、ジャン・カソー (Jean Cassou, 1897—) の『パリの虐殺』(Les Massacres de Paris, 1935) やナチズムに対する抵抗の文学として注目される (Vercors, Jean Bruller, 1902—) 『海の沈黙』(Le Silence de la mer, 1942)、『星への歩み』(La Marche à l'étoile, 1943) などなど、作家の「訴え」、その「思想」や「政治性」を抜きにしては作品の鑑賞はできないであろう。

「社会学」と「政治学」の共同研究態勢が「政治社会学」

という新しいジャンルを創り出したように、文学研究における「思想」や「政治」への積極的取組みが、人文科学と社会科学のチャンネルを見出す日も、そう遠いことではあるまい。「作家論」などにみられる文学研究の手法がさらに掘り下げられて、作家の全体像から「文学論」がうみ出されてくるであろう。文学作品は教養書として一般にも読まれるだけに、「文学とは何か？」を新たためて問い直す時機に逢着している。そうした意味から、本稿は、「試論」を目ざした「ノート」にすぎないが、機会を得てさらにこの問題を追求してみたいと思う。

(1) Alfred Cobban: Times Literary Supplement, 6 January 1956. (The biggest gap in the history of the French Revolution is, paradoxically, the history of the counter-revolution.)

(2) 一九世紀前期の文学については、ゲオルグ・ブランデス (Georg Brandes, 1842-1927) の『十九世紀文学主潮史』(吹田順助訳・春秋社版「世界大思想全集13」昭和四年刊) が詳しい。また、テューゲム (Philippe Van Tieghem) の『フランスロマン主義』(Le Romantisme française. Collection «Que sais-je?» N° 123) が、この時期の文学を要領よくまとめている。なお、政治的ロマン主義については、拙稿『シヨゼフ・ド・メーストルの政治思想』(『文芸と思想』第34号)、『フランス伝統主義におけるド・メーストルの「主権」概念』(九大「政治研究」第19、20号)、『フランスにおける保守主義——ド・ボナールの政治思想』(『文芸と思想』第36号) 参照。

(三) 当時もっともフランス的な思想家と評されたド・ボナー

ン (Louis Gabriel Ambroise, Vicomte de Bonald, 1754-1840) が、『フランス大革命についてのスタール夫人の著作に関する所見』(Observations sur l'ouvrage de Mme de Staël sur la Révolution française, 1817) を著している。最近では、グウィンヌ (G. F. Gwynne) の『スタール夫人とフランス大革命』(Madame de Staël et la Révolution française: Politique, philosophie, littérature, 1969) が出版されている。これは、第一部「大革命期におけるスタール夫人の積極的役割」、第二部「大革命期におけるスタール夫人の政治思想の発展——政治的諸著作」、第三部「スタール夫人と革命思想——イデオログ」、第四部「フランス革命の考察」から成っている。ド・ボナールは大革命を「迷い」と看做して拒否し、旧制度への無条件復帰を欲した。彼は、ジェルメーンが二つの感情、すなわち、父(ルイ十六世の財政長官であったネッケル)への愛情とイギリス讚美によって支配されたので、社会の根本組織を理解し得なかったと批判する。そして『大革命の考察』を政治小説であると評した。とに角、急進的^{ユラ}王政復古派は、彼女の諸原理に反対した。一般的に云えば、すべての論者がスタール夫人の熱烈なネッケル稱讚を批判した(尤ん、或る論者はこの稱讚のなかに孝心の発露をみた)。また彼女のイギリス讚美をアングロマニアとして非難した。しかし、多くの論者は、スタール夫人の諸原理を受容し、結論の多くを是認した。(Gwynne, op. pp. 272-284) なお、メイヤーによれば、「スタール夫人は一八一六年にあってすら、ボナパルティズムの脅威が決定的に克服されていないのを、非常にはつきりと理解している。彼女は一七八九年の自由主義革命の諸原理を支持しながら、一八一四年の急進的^{ユラ}王政復古主義に激しく反対した。」(J. P. Mayer, op. 『フランスの政治思想』三七頁)

(4) 大革命期に取材したもので、スペースの関係から本稿に論及しなかった作品は、シュテファン・ツヴァイク(Stefan Zweig, 1881-1942) の『マリアン・フーシェ——ある政治的人間の肖像——』(Joseph Fouché, 1929)、『マリ・アントワネット』(Marie Antoinette, 1932)、『ポール・ブルシエ (Paul Bourget, 1852-1935) の『宿駅』(L'Étape, 1902)、『アレクサンデル・デュマ (Alexandre Dumas, 1802-1870) の『紅い館の騎士』(Le Chevalier de Maison-Rouge, 1845) など』邦訳で通読できるものを列記するとどめる。大革命については、ツヴァイク自身の『詩的創造者としての歴史』という文章をかりれば、『普通なら百年かかるところを、たった五年の間に、あれほど多くの世界素材を自身のうちに吸収変化させていったフランス革命——ひとりの生きている人間の内部の思想と心のあらゆる面を性格学的に表現したあの時代。真の政治家だったミラボー、煽動家のダントン、学者で冷静で明晰だったロベスピエール、民衆煽動家マラーなどを、まずわれわれは思いだす。そのほかまぎれもない理想家たちや、しん底からの背徳者たちが、演技のかぎりをつくして活躍し、荒っぽい動作で交錯し、対立し、権力の座にのぼったり、首の座にすえられたりした。しかもギロチンへとつづくこのまったくふしぎな行列のなかで、前を歩む人を刑場へとかりたてるものはみな、自分の背後にもすでに人がいて、自分を同じ首斬り刀の下へおしやることになる。それは夢にも知らないでいる……なんという奇快な、ホルバインじみた死の舞踏会だろう。会場の人々は時を忘れて踊りくついで、ついに革命はその度はずれた大騒動のために自滅してしまう。いまや、革命の相続人ナポレオンは、打ちすてられた王冠をわがものとするために、ちょっと手をのばしさえすればよい——』(山下肇訳『ジョセフ・フーシェ』、『解説』三三七—三八頁) という次第である。